

「十九夜様は女の守り仏」

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司

野仏の一つに「十九夜様」と呼ばれる石仏がある。石仏の形態は、石塔に「十九夜供養」、「十九夜念仏供養」等の文字を刻んだもの、文字の上に、小さくご本尊である如意輪観音の浮彫を配したもの、あるいは如意輪観音の立体像を大きく形どり、光背の一部に十九夜等の文字を刻んだもの等である。そして、いずれにも「女人講中」の文字が刻まれている。



下岡本の
十九夜様の
催し

十九夜様の信仰は、本来、旧暦十九日の月の出を拜むものであり、十九夜女人講中とは、十九夜様と呼ばれる如意輪観音を信仰する女性の集団

をいう。大字単位に組織されるもの、坪等と称する大字の下の単位の集落単位に組織されるもの、また、年配の女性を中心に組織されるもの、若嫁たちを中心に組織されるものがある。信仰の内容は、ともに安産祈願が中心であり、十九夜念仏ともいわれるように念仏を伴う場合が多い。その念仏の中には、血の穢れゆえに地獄へ堕ちた女人を救済するという「血盆経」に由来する念仏もある。こうした信仰の背景には、医療が未発達の時代表、お産やその後の産褥で命を落とす者が多く、一方、女は血で穢れ罪深いとの意識が高まると、穢れから救済されたいとの信仰が高まった。安産祈願も血盆経念仏も女性ならではの信仰で、それらを意の如く全ての願いを叶えてくれるという如意輪観音に託したのである。

代頃までである。ちなみによくつかの十九夜塔の建立年を例示すると、暮田安産稲荷道交差点の十九夜塔は文化二(一八〇二)年、上戸祭町の薬師堂のものは文政五(一八二二)年、下岡本町の公民館脇のものは文久二(一八六二)年、宝木町二丁目湯殿神社のものは明治二(一八六九)年、鶴田町高麗神社のものは大正十二(一九二二)年である。江戸時代後期の十九夜信仰の高まりは、庶民の経済力が発展し、それに伴い庶民文化が勢いを増したことによるものであり、昭和三十年代以降の十九夜信仰の衰退は、地域住民の職業や意識が多様化されたことによる。さて、十九夜様の催しは、大方次の通りである。開催日は、旧暦十九日の日中である。回り番の宿に集まり、座敷の床の間にご本尊の如意輪観音を描いた掛軸を掛け、その前に



鶴田町
高麗神社の
十九夜様

お灯明とお膳を供える。お膳には、女たちが精魂込めて作った団子や餅、煮しめ等の御馳走を盛る。参加者一同が線香をあげ安産祈願をこめて拝礼、その後、ひとしきり念仏を唱えてから、如意輪観音に供えたと同じご馳走をいただきながら歓談となる。このように十九夜様の日にはご馳走をいただき、歓談をしたものであるが、それこそが十九夜様の楽しみであった。如意輪観音への信仰は表向き、本音は、男たちを気にすることなく、普段口にするこの出来ないご馳走をいただきながら、日がな一日オシャベリすることにあつた。それにより普段の辛い生活をも乗り越え、明日への力も湧くことが出来た。その上にお互いの絆も深まり、集落内での相互扶助等のお付き合いもスムーズになる。十九夜様の信仰は、女たちが生きる上で、大切な役割を有していたのである。